

羽鳥一紅と高崎の文人—天明の浅間焼け 240 年によせて—

令和5年3月3日（月）
於高崎市市民活動センターそしあす
高崎歴史資料研究会 中村 茂

文芸とは言語によって表現される芸術の総称。詩歌・小説・戯曲などの作品。文学。

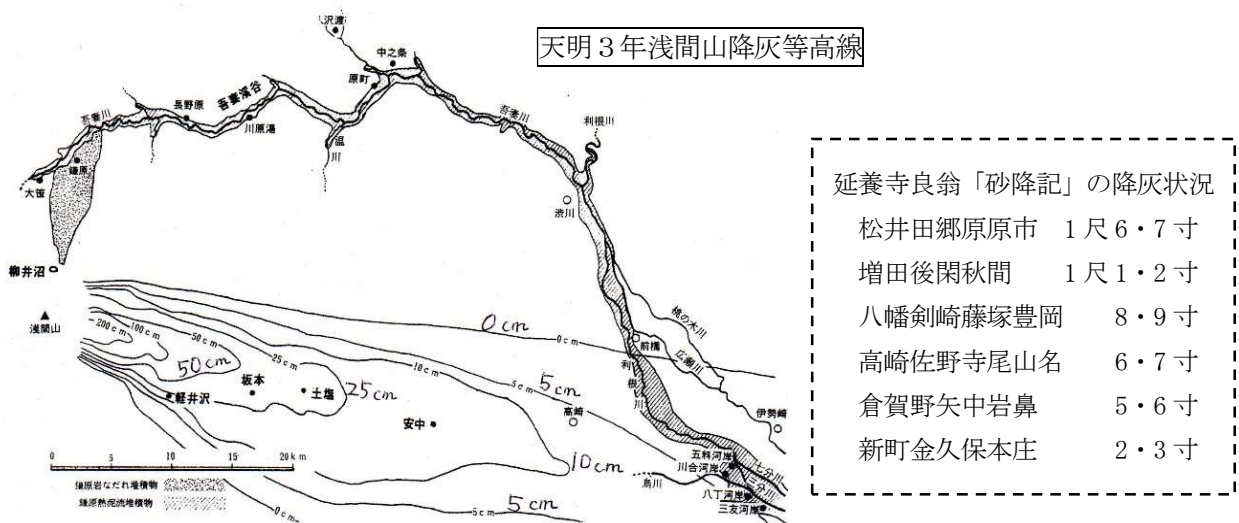
第一部 「俳山亭文庫」の紹介—高崎文芸のお宝—

○俳山亭文庫・・・篠木弘明氏（1918-2001）旧蔵の文芸資料 高崎市立中央図書館所蔵
俳山亭文庫所蔵目録（ホームページ） 俳山亭文庫書目解説（1991）
郷土史家、篠木弘明氏（大7～平13）が収集した古書群。現在ではほとんど入手することができない郷土に関わる文芸や民俗を中心とした近世・近代史の貴重な資料集成。江戸中期から明治初期に刊行された1300点を超える古書・古文書資料からなり、その約半数は高崎を含む西毛地域が占めている。平成8年度から2年をかけて購入。閲覧は学術機関に所属する研究者にのみ許可されている。現在、貴重資料の保護と一般閲覧者への公開を目的に、資料のデジタル化に取り組んでいる。

第二部 浅間噴火の経過

1-1 噴火の歴史 テフラ（降下物）

① 天明3年噴火（1783）浅間A軽石



②浅間B軽石 右大臣藤原宗忠の日記 天仁元年9月5日（新暦1108.10.13）

〔国中有高山、稱麻間峯・・・猛火燒山峯、其煙屬天沙礫滿國、火熾積庭、
國內田畠依之已以滅亡、一國之災未有如此事、依希有之怪所記置也〕

※上野国の浅間峯が爆発し、噴煙砂礫が国中に満ち、そのため上野国の田畑の多くが使用不能になった。

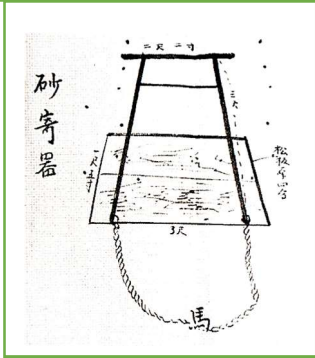
- ③ 榛名F P 6世紀中ごろ
- ④ 榛名F A 6世紀初め
- ⑤ 浅間C軽石 4世紀中ごろ

1-2 村の困窮

〔松平右京大夫様方御用番田沼主殿頭様へ御届書〕
 私在此上州高崎信州浅間山焼出候趣二而、当月二至り少々宛
 震動焼砂降候処、五日鳴響焼石砂強降申候、六日暮時方鳴響
 強石砂等所ニヨリ三四寸降積り、七日昼頃方闇夜之処ニ而鳴
 響等相止不申、弥降強ク城下町家五軒潰申候、八日未刻利根
 川俄ニ水出、焼石等田畑へ押入候処、無程常水ニ相成申候、
 尤城内別条無御座、人馬怪我等無御座候旨在所家来之者方申
 越候付、先此段申上候、猶亦委細之儀者追而御届可申上候、
 以上

〔天明三年下大類村年貢割付〕
 田高合六拾町三反三畝拾貳歩
 取米合貳百四拾八石五斗五升八合浅間山焼
 内 百六拾七石老升六合 砂降ニ付見分引
 残米八拾老石三斗四升貳合 当卯納辻
 畑高合拾七町六反七畝廿七歩
 取永合貳拾三貫四拾六文
 内 拾老貫五百貳拾三文 砂降ニ付五分引
 残永拾老貫五百貳拾三文浅間山焼

田 7割引
 畑 5割引



○大信寺領下和田村の砂片付

砂寄せ場は1反に2畝、寺領全体で1町6反余、収納160俵のところ20俵減収となる。
 田畑の隅に寄せ置いた砂は1反につき70俵、1町に付700俵
 5・6町ほど近所に砂捨て場があったとしても、馬1頭に振り分けて2俵1駄、手間とカ
 ネがかかる。捨て場がなければ田畑をつぶすしかない。

○中里村 天明7年 砂置地13町7反9畝 片付済5反5畝
 砂引 1町2反8畝 11% 5石7斗減

○南大類村 天明年中 100軒 人別360人余
 文化年中 70軒 〃 290人余
 天保7年 48軒 〃 264人
 弘化2年 手余り地26町歩 檜木植付窺い

○下飯塚村 天保13年全51軒 退転者を除き稼働できる家21軒
 耕地32町2反3畝・・・手余り地13町7反8畝余 全耕地の4割強を21軒で分担

砂降以来地味衰え次第に困窮家数人別減少、以前より助郷軽減、御手当米とか補助を受けているが、近年疫病死失もあり、別して人別減少、手余り地多分につき甚だ困窮

○上小埜村 せきそん山＝砂山
 ○柴崎村 古墳？ 実は砂山

第二部 羽鳥一紅と文月浅間記

2-1 羽鳥一紅 1724—1795 江戸時代中期の俳人。

享保9年(1724)生まれ。下仁田石井治兵衛邦教娘。

寛政7年(1795)没 上野国高崎の絹問屋羽鳥勘右衛門(俳号麦舟)の妻。建部綾足(たけべあやたり)にまなぶ。宝暦8年(1758)句集「あやにしき」ほか

天明3年癸卯(1783)60才で浅間噴火に遭遇。「文月浅間記」は噴火から3ヶ月以内に成立。刊行は一紅没後の文化12年(1815)11月。

夫 麦舟 通源麦舟居士 明和6己丑年(1769)正月11日没

妻 一紅 清體慧浄一紅大姉 寛政7乙卯年(1795)8月23日没 72歳。

姉は富永柳旨 正徳2年(1712)～天明7年(1787)76歳

2-2 文月浅間記の激賞者 —記録性と文学性— 伝播の速さ

① 播磨清絢 はりませいけんの評価

内閣文庫「浅間山の記」序文

今年七月、信濃・上野二国に沙火泥毛が降り、山は崩れ川は氾濫し、村は崩壊し人畜は壊滅した。描くべき内容は、これを源氏・栄華に較べれば天地の相違があるが、この書の文は紫式部の文の様式と情調を少しも失っていない。最もなしがたい文ではなかろうか。

冷泉公がいうには、上野高崎の女性で藤屋某の著わしたものと、まことに天が才能を生み出すに、古今の相違はないものだ、ということ語っている。宋人がたわむれに遜杭機雲の没後天は才子を生んだといったのはうそではない。ああ、この書のようなものは、ほんとうに才子の未曾有の書だといえよう

天明癸卯十月 播磨清絢書 於靈岸邸曹舎

② 神沢杜口の評価 大坂町与力

翁草「七月ノ記」跋文 天明4年9月
七月の記は、癸卯七月の信野二州の災異を記したもので、上野高崎の藤屋某氏の著わしたものである。事柄は詳細で言葉はすぐれ、よく記録の体を得ている。まことにすぐれた才ある女流文人である。ある人はこれを源氏物語に較べた。あてやかな趣があるのは、ともにたおやかな女流の手になっているからであろう。しかし、源氏の真実性というものは架空のことを真実らしく描いているのであり、七月ノ記の真実性は実際のことを真実らしく描いているのである。

③ 大典法師积顕常の漢文訳序

「北禅文草」寛政4年1792刊

一紅ハ上野高崎羽鳥氏ノ妻ナリ、才有リ倭文ヲ能クス、癸卯ノ変事其ノ親シク見分スル所ニシテ之ヲ記ス

頃ヨリ蝶夢法師携へ来リテ余ニ示ス、実ニ所謂業感劫災亦以テ人ヲ警ス可シ、因リテ語ニ随ヒテ之ヲ譯ス、必ズシモ辞ヲ修メズ、覽ル者之ヲ諒セヨ

※劫災=世界を滅ぼす大災害

④ 太田蜀山人の評価

「仮名世説」文政8年刊

文月浅間記は上野高崎羽鳥氏の女子撰するところ、天実^{あまのまこと}に才を生じて、才古今になし。宋人のたはぶれの説に、いはわる遜杭機雲没して後天才生ぜし事虚語に非ず。此書のごとき、真正の才子、未曾有の書と、播磨清絢これを賞して、其の序に書けり

2-3 高崎の浅間焼け文学

○^{きぼうさいいき}癸卯災異記・・・漢文 天明癸卯之秋 高崎川野辺寛子緯記

藩儒者 藩命により「高崎志」三巻、「閭里歳時記」を著す

延享3年(1746)4/28生～寛政5年(1793)2/18没 48才 葬小石川是照院

【空ヶ橋関所の崩壊】 牧関は本藩に隸シ吾妻川に臨む、牧橋は一柱も用いず、兩岸より鉅材を累ねて架けるなり、橋下より水際に至るまで常に数丈、而して俄に泥流岸に溢れ、大木流れに随いて橋を衝き、橋崩壊す、是の水勢益々湯々逆浪天に漲る。

○^{さこうき}砂降記・・・高崎延養寺沙門良翁録

噴火の51年後天保5年(1834)刊行

版木全27枚うち4枚欠

下滝村山口氏産

下滝慈眼寺・岩鼻観音寺を経て

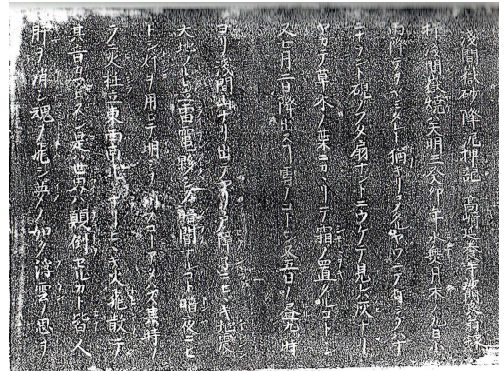
享和2年(1802)延養寺へ入る

文政9年(1826)莊厳寺へ隠居

文政10年(1827)船木観音建立

文政11年(1828)伊呂波便蒙鈔刊行 序文僧三 跋文馬場喜澄(若水)

天保8年(1837)1/27卒



2-4 文月浅間記の出版 文化12年(1815)霜月刊

○蔵版 茅花園・・・大間々住の狂歌師 号橘照房

壺梅園・・・江利川勘兵衛 前橋の人

○跋文 多胡廻屋直温・・・何者か?

〔跋文〕多胡廻屋直温
 こはかみつけの国たかさきのうま
 やどり羽鳥氏の刀自一紅のうし、
 皇国ぶりのかなもて眼のあたり
 見もしきゝもし、むかいつづりた
 る此一巻、ちかきわたりの人々は
 さらなり、うちわたす遠かた人さ
 へ、よりくに見まほしと さう
 ぞこしてもとめ来せしに、そがさ
 きくをめぐりくゝて、あはれく
 ちなん事をおそれ、はたおのれが
 ゆかりある事を知りて、友どちの
 すゝめけるがまゝ、こたび桜木に
 ものして、其人々におくりまいら
 すになむ、文化十あまりふたとせ
 といふとしの霜ふり月、多胡廻屋
 の直温がまをす。

2-5 羽鳥一紅の著作 宝暦8年武部涼袋(綾足)夫妻は羽鳥家へ宿る

○あやにしき 宝暦8年(1758)秋 一紅35歳 上毛高崎作者羽鳥何某 全40句

挿画涼袋妻紫苑 序文涼袋母衛子 評のことば橘氏蘭子 跋文呼雪妻小夜

○くさまくら 明和4年(1767)建部綾足序

姉富永柳旨・一紅・芙白・和青+田中反哺5人の善光寺紀行 一紅14句あり

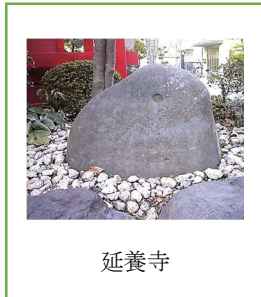
○孝子小伝 天明5年(1785)刊 武州下持田村(行田市)の孝子伝

2-6 羽鳥一紅と加賀千代女

加賀千代女 元禄 16 年（1703）～安永 4 年（1775）73 歳没 加賀国松任町の表具師娘

2-7 羽鳥一紅の句碑

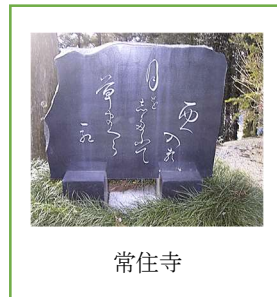
- 1 高崎延養寺 はじめて菊をつくる 植て待ば げに長月や けふの喜久
- 2 護国神社 雪よりも身にしむ風ぞ山桜
- 3 下仁田常住寺 西へ入る月をしたふてくさまくら
- 4 下仁田石井家跡地 初雪や 落さぬやうに 鷺のゆく



延養寺



護国神社



常住寺



石井家跡地

第三部 鈴木恭斎「藤蔭叢話」中の人々

○3-1 「藤蔭叢話」とは

- 恭斎は秋田の人 朝川善庵門下（天明元～嘉永 2 年卒、69 才）
菅谷帰雲の世話により本町梶山鼎亭（山彭）の故居に寓し藤蔭詩社を開く
毎十七日同志を会し詩書画の筵を開く
- 朝川善庵 文政 8 年「藤蔭叢話」の序文を記す
父＝折衷学派片山兼山（藤岡市西平井出身）の子、朝川黙翁の養子 博学経義詳。
中根香亭の外祖父 下仁田戦争碑—海舟・香亭撰・三兼書
- 菅谷帰雲 喜兵衛 清成 漢詩書法に達す 高崎文壇の中心 文政 6 年 8/12 没 70 才
文武に長じ、儒学を平沢旭山に、書を東江源鱗に学ぶ。市河寛斎の漢詩結社江湖詩社の一員であった。「帰雲山房絶句抄」「石上寺放生池碑」ほか
〔学書篇〕帰雲の書論 清水寺に碑がある。 帰雲の書は好事家に重宝された。
書には<文人>と<経生>の書がある。
書技は古典からしっかり学び気韻をあくまでも求めなければいけない。
書技の習熟があっても人品の高さが身につかなければだめ。
それは聖賢の跡を慕って日々の行いを律することによって
完成されるものだ。気韻を得るべく修行せねばならぬ。

○3-2 「藤蔭叢話」中の人々

- 01 积僧三 睡々子 越後の人 龍廣寺住僧 晩年箕輪龍門寺に入り終る 安政四年卒
- 02 安中玄祥 保渡田の医師 文瑛の親 人となり剛直
安中瑾亭 字文瑛 玄祥の子 少年にして藤蔭詩社に学ぶ 明治 14 年卒 71 才

- 東齋 初め文事無く中年に至り学門に志す 授勉強悉く暗記す
- 03 下田漆園 名は衡 箕輪の人 酒井侯に仕え白川邑宰たり 博聞宏識万卷を蔵す 市河寛齋支援
及弘 漆園卒後その職を襲ぐ 文を好み詩を善くす
青齋 漆園次子 山水を画く 詩は央巧を要す
- 04 道士栗園 青齋の郷友 箕輪本明院 初め漆園に学ぶ
- 05 福田太忠 福田宗禎 号浩齋 沢渡の医師 寛齋江湖社に学ぶ 東坡を慕い小蘇と号す
高野長英とともに「傑氏外科書」として翻訳した 天保11年卒50才
- 06 馬場若水 藩臣 代官馬場大輔 名は喜澄 温籍高風厳然たる老儒先生也、先生精詩書画 米庵
に書を倣い諸家に入出し一家を成す 高崎藩の詩人は若水の奨励より出ず
「若水翁詩稿」 天保9年卒57才
- 馬場 昇 藩臣 大輔子 号南山 弱冠学を好み書を善くす 碑石揮毫有り 遺墨を伝う
- 07 小林遜齋 藩臣 願蘇を尚び鉄筆を善くす 篆刻専門の人に勝る 求むる多し
恭齋の琥珀象牙銅印亀鈔印は遜齋篆刻 元治元年卒74才
- 08 鈴木懶齋 藩臣 名は敬之 医を好み 書を読み詩を作る
- 09 永井静齋 藩臣 雄次郎 次郎助 詩は淡情にして好んで墨梅を描く 天保14年卒51才
- 10 甘利翌齋 藩臣 書を好み二王(王羲之・王献之)に倣ひ蘭をたくみに画く 没年未詳
- 11 正木玄泰 秋田医官 江戸の人京都に学ぶ
- 12 积雲亭 住大類慈願寺 禅寂の傍ら詩書を好む
- 13 柴田寿庵 名正輔 文人韻士と酌て朗然として娛む 長松寺八景を詠む 文政8年6/9卒53歳
柴田佳庵 菊屋彦太郎名正興 好臨池慕(趙)子昂 天保3年卒29歳
- 14 河村歆堂 宿亭金升屋主人 享和3年伊能忠敬泊 文化4・9年小林一茶泊
詩人 忠実寡言 米庵の書画を倣う 安政3年卒61才
- 15 甘霖外史 高橋東平 名定龍 恭齋門下 玄祥を介して 吟ずる所極めて風趣あり 天保10年卒
- 16 池野清升 号聖石 学ぶこと晩にして成すこと速なり 生没未詳
- 17 羽鳥擇齋 号霞峰 篆刻家 生没未詳
刻印の朱文に於ては春花の風に舞うが如く、白文は寒山積雪の如く、頗る妙あるを覚ふ
- 18 青木笠齋 弱冠画を善くす 詩を恭齋 画は父周溪に学ぶ 安政3年没53才
青木周溪 新紺屋町上絵職人 幼より画を好み高信法眼永徳に学ぶ、頗る著色の法に達す
「高崎談叢」ほか 弘化2年卒73才
- 19 池上東昌 寄合町染色業 号順天 性磊々落々人物花鳥を能くす 書を帰雲先生に学び画を柴田
是真の師鈴木南嶺に学ぶ 是真は池上家に数年寄食す 安政6年卒60才
- 20 清水如岡 質朴和易 寸陰を以て大いに経義に通じ詩も亦心を尽す
- 21 三伯柳齋 伯順の親 江戸処士 来りて田町に外科業医し治術老練 帰雲没後伯順を恭齋に託す
- 22 伯順彭齋 三伯の子 初め帰雲先生に学ぶ 少年にして作詩を善くす 伝歴未詳
- 23 反町暢亭 李堂と号す 詩名ありて遺墨を伝ふ 伝歴未詳
- 24 梶山鼎亭 字伯彭 称公老 与惣右衛門 世々駅長たり 其書字勢雄渾 文化7年没51才
- 25 梶山公牛 高浜村木暮氏 鼎亭の嗣 藤蔭居を恭齋に提供する 天保5年卒54才
石曾根容齋(岩城村人) 橘 柑齋(下仁田人在高崎) 高橋朝爽(勢田赤城山祝司)
遠藤桑畝(阿波名東人) 梶山李堂(公牛の子) 梶山溪山(李堂の弟)
木暮巽堂(玄泰門人字篤郎) 雪水上人(玄泰友人掛錫吾妻普光山) 新井吾山(玄泰友人)
矢野直齋 福田儼(沢渡人)

第四部 高崎の文人一束ひとつか

4-1 高崎の地誌

- 西田美英（高崎寿奈子） ○川野辺寛（高崎志・閩里歳時記）
- 土屋老平（高崎旧事記・倉賀野誌・片岡郡誌）

4-2 高崎の随筆

- 和田自寸「鼻闕猿」 俳号胡水 元安藤藩臣 寛永15年～正徳5年卒78才
信仰・民間伝承・土俗方面に渡る随筆集
- 菊屋（柴田）彦太郎繁脩 武州葛和田村根岸氏 寛政2年卒
子育ての教訓書「世わたり草」天明8年序寛政元年（1789）刊
- 青木周溪 弘化2年卒73歳
「高崎談図」初市だるまの絵 文政12年10月刊
「俳家百人集」文政年間 周溪と笠斎の画像入り 高崎俳人多数掲載
- 白井守静「長崎紀行」文化4年 漢文 「上毛及上毛人」掲載



菊屋彦太郎 薬の広告



高崎談図 田町だるまを売る図

4-3 高崎の日記

- 「矢口丹波正日記」全52冊（天明元年～明治17年）市重文 ※国文学資料館でデジタル公開
八幡宮神官矢口正善・矢口以真（俳号一多）親子で書き継ぐ
天明3年4/20日の日記「朝きりまく、五ツ方天気吉、高崎一紅方巻来ル」
- 既刊・・・高崎町奉行日記 原小兵衛日記 柴田源作日記 山内良平日記 斎藤義一日記 ほか

4-4 高崎の戯作

河野帰橋 蓬萊山人帰橋 狂歌名大の鈍金無 遊里を題材とした洒落本多数
寛政元年卒の新右衛門通秀か 藩主により活動差し止め

4-5 高崎の和歌

宮部義正 歌学を冷泉為村に受ける。將軍家歌道師範、関東の公家と称せられた
横濱正倫「旅のすさび」 生前の墓石に勒した辞世を意に満たず削り取る
松井義烈「弥生路之記」慶應4年3月御惣容様高崎引越の随行紀行（和歌）
〃 「松井興定沼田城下で三回喧嘩をした話」・・・松井家先祖の武勇伝
鑑子盈子大河内まつ子 宮部万女 深井慈照尼 浅井寿貞尼
西岡妙善尼 下石丈右衛門 富岡正美 堀松碩

高崎一紅方巻来ル

彼は難義ユエ用ヒス

斎藤糸左衛門——昌平覺の時、友人から鍋島侯白鼠にかまれ甚シク痛ミ衆医効ナシト聞ク
青山弥門——銚子領医師、河豚毒治療ニ実績アリ。ツワブキ葉の摺り汁ガ神験アリ
宮部太夫——50歳余腎氣衰退両脚衰弱、食味ナキコト数年便秘、消渴（糖尿）ニテ死
大沼九左衛門——胸下・臍左ニ小塊、過去不見。他医師も不治、親族へ不治宣告

○〔椿庭雑録〕伊谷氏の読み方

余カ同藩ニ伊谷氏ナルモノアリ、谷ヲヨクトヨメリ、一日余ニ語リテ曰ク、谷ヲヨクト唱ルハ
皇朝ニテハ珍シキコト也 吐谷渾ヲトツヨクコトヨメハ谷ニヨクノ音アルコト知ルヘシ

第五部 高崎藩の学者・芸能者

儒者	市川多門 犬塚印南 川野辺寛 山本勘十郎 松田多助順之 長谷川昆溪
手跡 (唐)	菅谷清成 (号帰雲) 三井之孝 嶋田弥七郎 (号商山)
同 (和)	佐橋平兵衛 川村喜八正秋 瀬木伴助 斎藤林八郎 黒川九八
	松本文七双松堂息純 池田作左衛門弄文堂敬迪 大木森助安民 渡辺岩七湊家堂尚賢
馬術	木村文内 中川岳山
鎗術	小熊奥平 本木熊右衛門宝蔵院流 大澤武平
劍術	寺田五右衛門 井上多仲戸田流 津田金蔵
鉄炮	豊嶋源太左衛門稻富流 柴山角兵衛親安武衛流
居合	伊賀金右衛門一宮流
水練	中川岳山 石山林右衛門
歌道	中山八右衛門 松本為右衛門
画師	長谷川雪嶺 山本助九郎 中村忠作
細字	繁倉辰右衛門 岡登新吾
鼓	中沢岡右衛門
軍書講釈	長谷川久右衛門
医師	吉川昌菊 生駒玄碩 山田昌仙 高島意伯
忍術	馬場治部右衛門
算術	富田又五郎

第六部 高崎の八景絵巻

6-1 並榎八景 文化元年 1804 成立 画人神宮守満 新比叡山八景絵巻という

並榎八景	漢 詩 和 歌	作者
<稲荷山暮雪>	似箇風向誰者描 晚雲簾雪更瓢瓢 玉山瓊樹幽林外 點出青燈照寂寥	鼎亭彭
	稲荷山 くれゆく三つの ともし灯に かけてはえある 雪のしらゆふ	佳明
<烏川漁舟>	萬事人間一縷風 生涯閑作釣漁翁 冽鴉帰盡天将夕 棹出似青柳緑中	南陵金正風
	をのが巢に かへる夕べの からす川 釣の小舟は数ぞそひ行く	敬徳

<片岡秋月>	高秋名月照林鸞 一片岡頭素影寒 陳迹欲窺松樹色 清光偏似雪花口 この寺の 軒にむかひの 片岡に いく秋すめる 山のはの月	烏水田豹 景平母
<新比叡山晚鐘>	烏水東頭新叡山 山鐘高響落暉間 下方十里聲將暮 幾処婦人共鳥還 新比急や ふかき御法の 風そひて かねひくゝなるゆふ暮のそら	島宣範 慈縁
<雁田落雁>	蕭條平野暮烟連 処々秋風雁滿田 此地由来名亦久 桑群為陣落青天 秋は先 をのが名にあふ 田のもとや ここにおちきて あさる雁かね	田熊 大澤知恒
<筏場夕照>	暮色催来筏渡頭 一川遥帶夕陽流 高城晴景看如画 照出三層粉壁楼 はへあれや 夕日をのせて きしくだす 筏になみの花よせきて	大澤知恒 大澤武雅
<愛宕晴嵐>	千山西望静晴暉 萬里無雲一鳥帰 愛宕宮前憧憬色 映人嵐翠欲沾衣 愛宕山 それだに雲を 吹なして あらしの跡に 残るまつ風	流水軒 宗閑
<唐崎夜雨>	彷彿唐崎雨欲催 夜燈閑照烏川 孤村暗似孤松望 虚覚清風拂蓋来 さひしさを いかに住らむ 唐崎の よるのともし火 かすかなる里	周明稿 良真

鼎亭彭＝山彭梶山鼎亭 佳明＝藩士大沼勝弥 南陵金正風＝豊岡金井正風 敬徳＝田町羽鳥氏、俳名麦仙
 烏水田豹＝藩医吉田周斎 景平母＝藩士深井藤兵衛妻 島宣範＝藩士嶋崎儀兵衛 慈縁＝天竜護国寺住僧
 一元上人 田熊＝田豹弟、藩医吉田友甫後熊甫 大澤知恒＝田町商大沢佐市 大澤武雅＝上並榎村里正
 流水軒＝長松寺住僧 宗閑＝田町商辻伝右衛門 周明＝仏工、箱田村移居九蔵町 良真＝岩鼻観音寺住僧

6-2 高崎八景詩画卷 天保10年成立 画と漢詩の巻物装

高崎八景	漢 詩	上段 作者 下段 画者
<寺尾夜雨>	沼深邨遠屋何頭 烟草凄迷暮色愁 未必老農岑寂遐 西風夜雨卜豊秋	檉窓道人 周溪
<乗附暮雪>	暮雪点淡暮点低 熊野祠前望已迷 傍径山村銀一簇 水晶宮裏占幽栖	睡々子 周溪 <small>カ</small>
<鷹城晴嵐>	松縁花紅水際鮮 画出鷹城三月天 嵐引炊烟夕陽艶 錦屏風接碧窓辺	吉格 笠斎
<清水晚鐘>	鐘破大悲閣上烟 鐘聲響度夕陽天 恐花底莊周蝶 不使幽人石榻眠	養素 池上東昌
<半田落雁>	数行雲雁下山頭 相唳相呼集侶儔 歳熟人間馳贈禄 稻架飽啄半田秋	南山閑人 睡々子
<廟前秋月>	金風驀地正清秋 水冷砂明西岸流 誰引賽燈溪月色 照看廟宇現城頭	雪陵 清谿
<聖石渡舟>	両派流来為一路 片岡群馬界分津 渡頃日暮行人少 白鷺窺魚立繫舟	永萬年 陳斎
<落合夕照>	鴉翻枯木梢頭宿 人在活凶画裡行 村口別余風趣得 斜陽閃処酒簾明	井巽堂 乾斎

檉窓道人＝威徳寺住僧、周溪＝青木周溪、睡々子＝僧三、龍廣寺住僧、吉格＝吉田平格カ 笠斎＝青木
 笠斎周溪の子、養素＝中原氏、池上東昌＝上画師、南山閑人＝藩士馬場昇、雪陵＝不明、清谿＝不明
 永萬年＝藩士永井静斎、陳斎＝藩士川合氏カ 井巽堂＝木暮氏、乾斎＝藩士矢島氏

6-3 長松寺八景 柴田彦太郎正輔=寿庵の和歌のみ 画と漢詩はない

昭和27年6/26 清水糸蔵による解説付き

八景	和歌 作者は八景ともに柴田正輔(柴田彦太郎) 02
<烏川春水>	空に鳴 聲ものとかに からす川 ゆく水遠く かすむ曙
<赤城霞漂>	春の日を あかす暮ぬる 赤城山 こすえ遥に 霞わたりて
<榛名晴嵐>	遠近の 緑すゝしく はるな山 くもゝ残しぬ 岑のあらしに
<住吉眺望>	千町田の なひく早苗に 瑞牆の まつ吹風の 行衛をそ見る
<清水晚鐘>	木の葉吹 風にたくひて 聞ゆ也 きよみつ寺の 夕昏の鐘
<片岡樵径>	しは人も たか為にとか 片岡の もみちをつとに 折そへぬらん
<和田城跡>	跡そ猶 世ゝにふりゆく 武士の ありし大城の 名のみ残りて
<後場雪月>	雪をのせ 氷をわくる そま川の いかたの床に 月そさへゆく

※ほかに享保の初め頃大染寺八景があり(高崎寿奈子)、宮部義尚発句・野上道堅詩が知られる。

第七部 高崎の辞世 旧高崎城下墓石に刻まれた辞世・遺章・追悼

※お好みの歌はあるでしょうか。

01 人魂も 花阿る方へ 飛て行	21 かへす聲 しで乃山路や 時鳥
02 鳴たつ多 路なつかしや 鳩鳩	22 月かけハ ありて影なき 於ほろ可那
03 人力も いらず暮れゆく かれ野かな	23 こ可らしや 西に入る日の 山からす
04 萩寺や 浮世の人乃 濡す袖	24 何笠で ゆかんあの世の 五月雨
05 阿の声を 聞敷今日の 命かな	25 懐の 子に迷けり 秋の夕
06 漸寒や 用意の足袋も 妻こゝろ	26 気にさはる 聲とはなりぬ 秋の蟬
07 西乃空 鳳巾のゆく衛に 思ひけり	27 はる雨や 法の花見の ひとり旅
08 ながらへて 霜のあしたや きりぎりす	28 灰になる 其魁や 炭の麓
09 夏ゆめを みたりず爐の 氷るとき	29 □毛乃 毫の阿ゆみ越 夏□可奈
10 行旅の 闇路ハ廣し 時鳥	30 根にちから 姿聞てやさしき 柳可那
11 秋風に 我もち里ゆく 物の数	31 寒菊乃 露や涙の 九十九髪
12 ふるさとに 思ひを馳せて 春を待	32 朝顔や 入相までハ こらへかね
13 みし可夜の 夢や蛍も 艸の露	33 よき頃と 人も云ひけり 散る桜
14 塵の世の 名残越□能 わらし可那	34 音もなき 香もなき 露の落処
15 捨て行 ものニハ惜き □乃春	35 さそはれて われもち里ゆく 落葉かな
16 十五夜は 見たし世界は かわれとも	36 何といふ 言の葉もなし 蓮乃花
17 行旅に 三筋の糸や 酔さ免の水	37 見くらへる 松は気高し 竹の春
18 日のいてぬ かせのさむさや あさの旅	38 枯てさへ 影を落さぬ 尾花哉
19 月花の なかめハかれて 虫のこゑ	39 雪風に 肌もつめたく 畦の道
20 法楽□ 月雪花乃 □□□	40 ゆく先も さきの春なり 桃さくら
	41 あさがほや 金銀瑠璃の 経の声

42 おしなべて 旅はうき世を ゆくに□□ 花見ゝ越へる 秋乃あたし埜

43 兼てより かくやと思ふ はかりにて 此身其俣 佛とそなる

44 世を去りて 體は蟬のぬけからそ 我が魂は 弥陀乃浄土へ

45 果しなき 遠き旅路を行空は 涙の雨にかき暮れませり

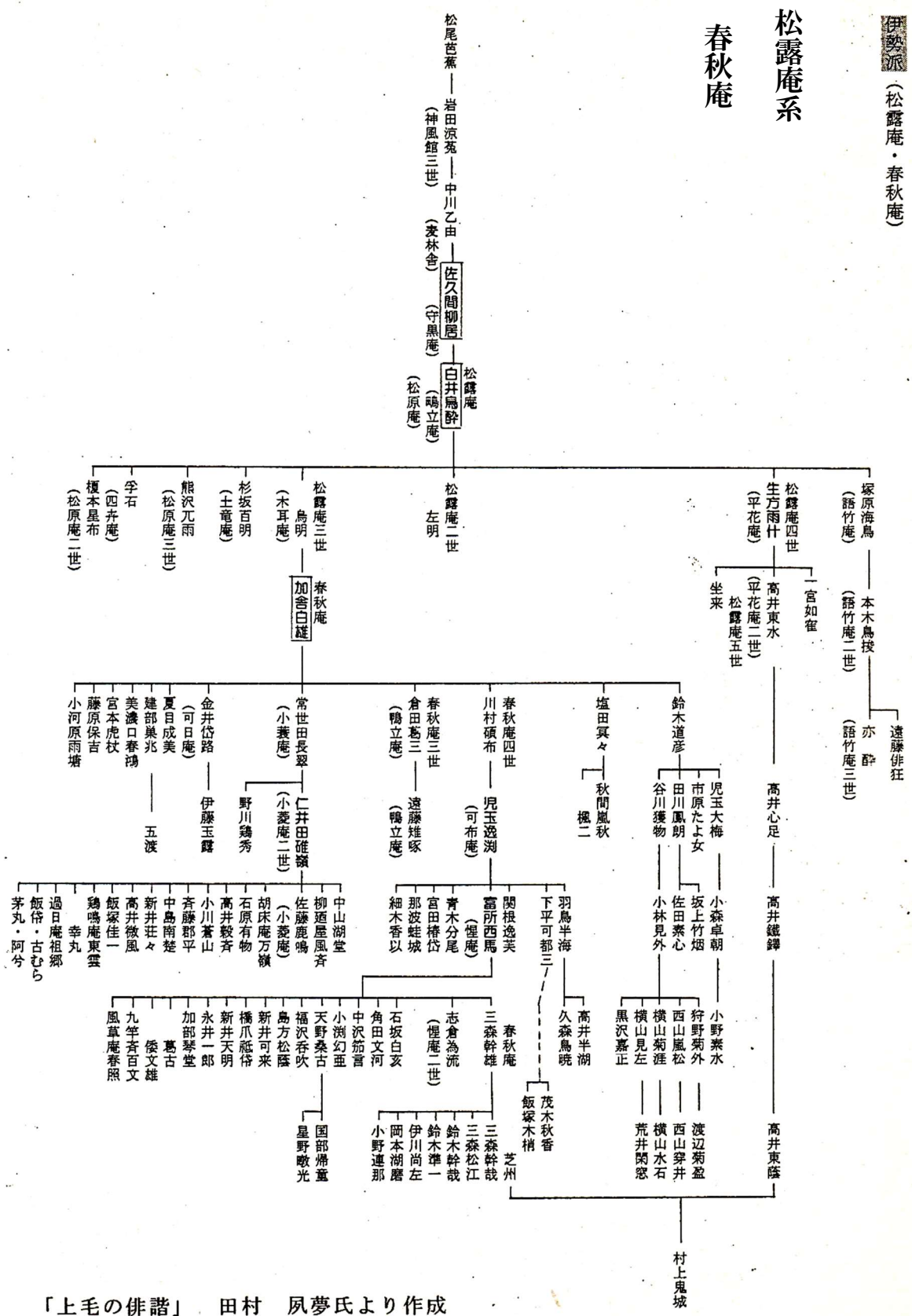
46 帰らしな 志るへ無くとも一人ゆく 死出の旅路は こゝろ安けれ
47 この石の 下に入らんとかねてより 我名もあなもほりてをく也
48 たのみなや あすをまたで消にけり 夢のうき世は 一日の夢
49 千とせへん 菊もあらしにちり塚乃 つちに帰れる露の玉の緒
50 とき遅き ならひハあれと世の中に あまねくちらぬ花とてハなし
51 時しあれ ばかならず花は散ものを おしと見るらん歌のなりけれ
52 いかにせん おれしみどりに生たちて おくれさきたつ 松のこぼれ葉
53 汗たれて 匏かけたる檜の板の 大節小節 光□□
54 西方の 弥陀ハ浄土の父母なれば 七十六津之はつの□□
55 あなを出て 八十八年□きたかと 夢見てくらすけふのあないり
56 手をあわせ かえらぬ声と知りつゝも 佳きできごとを我は語りつ
57 夢にしも 我身とゝめて異国は とはしな君か松の下露
58 夢の世の あきもいつしか たつた山 もみちは土に かへりこそすれ
59 つみの身の 夢の枕をかはさばや 苔の下なる 長き夜床に
60 満くとても 待れぬものを 一いきにひらくる法乃 はなのさきの世
61 かぞかぞに 厚くつかへし恵に而 米とこかねの玉ものそかる
62 七十能 よはひをこゑて ミつしほの かのきしちかき 船出嬉しき
63 今ハたゝ 佛乃御名をとなへはや おはるこの身の声をかきりに
64 生れ来し 暦の年に帰る身の うれしく入や西の浄土へ
65 世の中の 萬器万像弁へて 阿らしら沼と 行は念佛
66 五十年を 夢に暮して□□能 花乃さかりの世とそしりぬる
67 在りし日の 好める花ぞ 今は亡き 遠く眺めん 撫子の花
68 よしや身は 露と消ても魂ハ 高き御国そ いさ昇らん
69 今ハはや 月雪花を 捨つる身の たゝ一すちに 弥陀のミ国へ
70 乱れしと 思ふこころの 終りには 死てのみちも 迷はさるらむ
71 一すしに 佛の美名を志るへとて にしへたとら舞 長月之空
72 六道乃 まよふちまたも 念佛乃 たゝ一すちに 弥陀の浄土へ
73 かきりあれハ つきなむとする あかつきの ゆめのあとなし 我思かな
74 皆さらハ □□□もいつかミな□の あつさをしのき 弥陀の浄土へ
75 戦場も 苦□も潜り怒希 □□□さへ地獄へ いこか極楽に生
76 おもひ出に かむまで詠む 時もかな 月の夕や 花のあしたに
77 もろともに 消えなんものを露の身の おくれていそく弥陀の浄土へ
78 寂光の 都はるかに 覚けり 今よりいそく 死出之旅立
79 国をたて 君なき月日 二三とせ ふたこゝろなく 老身の果
80 久かた乃 月之入さきの 山の端に なきてさそへる ほとゝきす可那
81 嘗在濃陽 忠排横荒 英名有問 水潔月彰

以下略

伊勢派 (松露庵・春秋庵)

松露庵系

春秋庵



「上毛の俳諧」 田村 夙夢氏より作成

吸露庵

